

平成四年  
(1992)  
十月十五日発行  
(年四回発行)



第九号

猫 芸 通 信

発行人 東 明 雅  
発行所 柏 市 柏 市 柏 市 柏 市  
Tel. 0471-75-1192

連歌十徳

東 明 雅

連歌師宗嗣(一四五五没。七十歳)が心敬(一四七五没。七十歳)に伝えたという連歌の功徳十項目は次の通りである。

① 不詣叶神慮(詣らざるに神慮に叶う) 神社にお参りしなくても、連歌をやっておれば、神様の御心に叶い、御加護を得ることが出来る。

② 不懃至仏果(懃めざるに仏果に至る) 連歌をやっておれば、自然と仏道を修業して、成仏という結果を得ることが出来る。

③ 不尊交高位(尊からざるに高位に交わる) 身分の低い者でも、連歌をやっておれば、自然と位の高い人たちとも交わることが出来る。

④ 不恋思愛別(恋せざるに愛別を思う) 連歌をやっておれば、別に恋をしなくても、愛するようこび別れる悲しみを味わうことが出来る。

⑤ 不行見名所(行かずして名所を見る) 連歌をやっておれば、諸國の名所の句を作ったり、味わったりするので、實際行かなくても、行ってみたと同じである。

⑥ 不老知古今(老いざるに古今を知る) 昔や今の出来事もよく、一巻の中に出るので、年若くても物知りになることができる。

⑦ 不親為知音(親しからざるに知音となる) 一座すれば誰とも仲よくなり、よく知りあった親友となる事が出来る。

⑧ 不節遊花月(節ならざるに花月に遊ぶ) 春の花、秋の月、その美しさを春秋でなくとも味わうことが出来る。

⑨ 不移宜四季(移らざるに四季に宜し)

四季の推移が一巻の中に自然に出てくるので、それも味わうことが出来る。  
⑩ 不捨運憂世(捨てざるに憂世を運る) 連歌をやっておれば、その時は極楽で、わざわざ憂世を捨てなくても、そのような気持になる事が出来る。

以上は連歌の功徳であるが、江戸初期の俳人、斎藤徳元(一六四七没。八十九歳)は、それに加えて、俳諧(連句)の徳を五つ追加しているので、併せて紹介しよう。

① 連歌は雅語を用いるけれども、俳諧(連句)は俗語を自由に用いることが出来る。

② 俳諧(連句)は、自分で自分の作品を自慢しても、連歌のように格式のある上品な文芸ではないから、人も許し興に入るのである。(但し、これは江戸初期の俳諧観である。現在は違おうだろう——筆者註)

③ 俳諧(連句)は即興の詩で、何の準備もいらぬこと。

④ 俳諧(連句)は初心の人も字びやすく和歌の道へ入る手がかりになること。

⑤ 俳諧(連句)には、来歴のはっきりしない故事、出典のあやふやな言葉でも、句にしておもしろくさえあれば、何でもひろく取り入れてよいこと。

(連歌十徳は私の古いメモにあったものの、出典不明。)

『七部集』と『古今集』の計量的比較  
海野 海砂

およそ半年の間ぼつりぼつりと打ち溜めた『七部集』が完成してコンピュータに覚えこませることができた。入力しながら一句一句を熟読玩味できたことが収穫で、自

分に代わって句を捻り出してくれる訳ではない。検索機能を使えばたちどころに読み出してくれるところが値打ちだが、生かすも殺すも活用の腕前しだいだ。

入力しながら、現れる文字の頻度に興味を持った。花や月の名詞は当たり前だが、「見る」「思う」「聞く」などの動詞が気になって完成後直ちに数を当たってみた。

『七部集』三、四七〇句中「見る」とその活用形が二六九句(七・七%)あって断然多い。「思う」が四一句「聞く」が三四句で思いがけず少ない。

単純計算で歌仙一巻に三回の「見る」の出現率となるが、これは連句の部と発句の部とに分けなければならぬだろう。

『古今集』仮名序に「心に思うことを見るもの聞くものにつけて言いたせるなり」とあって、「古今集」一、一一一首は「思う」が二二九(二〇・六%)で断然トップだった。「見る」一九一(一七・二%)と続く。なにしろ「われを思ふ人を思はぬむくひにや我思ふ人の我をおもはぬ」と一首で四回も思いまくっているのだから。

『新古今』では「思う」が三三〇(一六・六%)「見る」三〇七(一五・五%)で少々減ってはいるものの古今の流れはしっかり受け継いでいるようだ。

和歌が「心情」の文芸で俳諧が「視覚」の文芸などと素人の即断は危ないけれどなにやら接吻の最中になつちり目を見開いている俳諧氏と、うっとり瞑目する和歌嬢を思わせるものがある。

俳諧では、発句の切れ字が「思う」にかわる詠嘆を表現する。付け合いは皆まで言わぬところに以心伝心の面白みが生ずる。

「思う」は行間に飛び交って表面化しない。和歌はモノローグ、俳諧はダイアローグの違いが表現法にも現れて面白い。

「見ろよ八っあんが新聞の字を勘定してるぜ」などと仰せなきやう。

「こんばんわ。」お玄関の格子戸をがらりと開け、そのままずつと奥へ通る。勝手知ったる他人の家、とはこのことだろう。

毎月第四月曜日、六時を廻ると、式田和子様のお宅（桃径庵）に、四宮会の面々がぼつぼつ集まってくる。メンバーは約二十人。二席或いは三席にわかれ、和氣藪々の内、二十韻にひとときを過すのである。

四宮会とは、この会の初めての会場、杉並区四宮区民集会所からとった名称。今から五年前の昭和六十二年六月、四宮区民集会所で教養講座として公募に依る連句会が発足。初めのワンクールは明雅先生が講師として御出席下さり、その後は自主講座となつて毎月続いて来たのがこの会である。

主宰は式田和子様。毎回連衆の為、自転車のうしろに、お酒とお肴を山と積んで来て下さつて、会はいつも盛況だった。

平成二年三月、和子様の御夫君が逝去され、会場は集会所から式田邸へ移つた。それ迄は、九時に追い出されていたのが、時間制限がなくなつたのと、気兼ねがないのとで、どの席も、時には十時を廻るほど、悠々と楽しみながら巻くようになった。

和子様のお住居は、お玄関が今時珍しい三和土で、当夜履物がずらりと並ぶところは盛観である。御門の内や、広縁の先のお庭には、御丹精の四季の花が咲揃い、発句や付句の中に、その折々の季節の植物が囁目として度々詠まれている。

この会一番の魅力は、たっぷりな東西の銘酒と、まるでお正月みたいな和子様の御手料理の数々で、表が終るのを待たず、赤い顔が並ぶのである。おいしい煮魚やお煮、かやく御飯のおにぎりや焼むすび等、

まさにおふくろの味そのもの。独身男性には、こたえられないディナーの筈だ。

四宮会のメンバーは、よちよち歩きの坊や連れのババママ、小説家、編集者、大学教授、映画製作者等々、実にバラエティに富んでいて、それ故、付句も誠に個性的。脱線はもとより、転覆もしかねない勢いに、その座のお捌きさん（主に和子様）は、苦心惨憺の御様子である。

例会のほか、集会所のお祭の際は、笠着形式で参加し、明雅先生にお捌をお願い申し上げたこともあった。又、埼玉県寄居へ時行し、由緒ある鮎の宿で歌仙張行をしたこともある。併し何と云つてもハイライトは麻布十番夏祭。毎年八月、和子様の令嬢恭子様のマンションで行なわれる笠着連句である。通りがかりの人が足を止め、笠を着けたままで句を付けていく形式で、日頃御無沙汰勝ちの人が表われたり、メンバーが友人を連れて来たりして、それは賑やかである。お部屋の直ぐ下の踊場から、音頭や太鼓の音が湧き上がる中、飲んで付け、食べては付け、ひと踊りしては付け、夜店を冷やかしては付け、次第に巻き上つて行く楽しささつたらない。

今年の当日の歌仙の表を披露したい。当夜めでたく満尾したものである。

歌仙 「十番の秋」 式田 和子  
十番に秋の訪れ風の色 和子  
かなかな蟬の鳴きやみし月 好敏  
大広間菊活け終り塵もなし 健悟  
皿鉢料理を卓に並べる 遊  
欠伸する猫の後脚のびきつて 哲  
煙草ぶかぶかささる寒取り 凡

四宮会は毎月第四月曜日午後六時からです。連句なりたい方、飲みたい方、食べたい方、どうぞお出かけ下さい。当日は玄関の鍵は開いております。

A C C連句入門講座の初日、季刊「連句」誌を頂き、掃路車中で拝読。第十一回俳諧芭蕉忌、第三十九回猫養会の興行での二十韻八巻の作品が掲載されており、興味深く読ませて頂いた。その中に、「寒菊や粉練のかかる白の端」の立句、瀧川雅代氏製の作品に目が止まった。他の巻とも、作品についての初心得、私なりの初心の世界から私なりの初心で、楽しんで頂いたのですが、「寒菊や」の句に気を引かれ、親しさを感しました。というのはこんな事からを思いだしたからです。

秩父礼所三十三番水寺境内に、芭蕉五十三回忌を修した折の建立句碑があります。高さおよそ一、四メートルの碑の正面に、芭蕉句塚と刻され、その両脇に「寒菊や粉練のかかる白の端」の句が、振り分けに刻まれていたのです。いたのです、ということとは、何としても、寛保の頃（一七四〇年代）ですから、風化剥落がひどく、やっとなかから、程度の文字しか判読できません。これは、建部涼袋（一七一九—一七七四）の浄書で（義仲寺に芭蕉句碑建立の報告をされ、登録済）全国的にも、古い句碑とされているようです。当時、涼袋師を中心に、地元の俳諧愛好者達が、芭蕉五十回忌を修し、一大イベント興行を打つたと推測されます。芭蕉忌に因み、「寒菊や」の句を立句として、二百五十余年前の連衆と、平成三年十月十二日、深川芭蕉記念館で、二十韻を巻かれた猫養会の皆さんと、時空を越えた筈に、蕉風山脈の偉容さを思わずにはいられませんでした。

仕事でバンクーバーからの帰り、J A Lの機内でいそいそと扱げた新聞には何と、「ヤクルト、泥沼の九連敗！」とありました。

はつきり言つて僕は、二十数年來の熱狂的なヤクルトのファンなのです。また悪い癖が始まったかと思つて、がっかりして日本に帰る気を一瞬無くした程でした。

思えばヤクルトは、昔は五連敗して一勝するといふパターンばかりでした。常勝の巨人とは違つたので、そのかわりたまにヤクルトが勝つと、その喜びは五倍にも六倍にもなつたものです。次の日のスポーツ新聞をコーヒーを飲みながら読むこの至福！何か、今の僕に似ている気がします。

A C Cの教室で付句を出して、ドキドキしながら、（おこがましくも）票が入るかなと思つていと案の定、一票も入りません。もう発言する人も残り僅かになって、何のほずみか僕に入れてくださった人がいた時の嬉しさは、まさにヤクルトなのです。初心者にも、連句は充分に楽しく嬉しいのです。

次の一球で何が起こるか分からないといふ野球は、よく筋書のないドラマだと思われませんが、連句の付句もまさに同じだと思います。

夕方、そわそわしながら見る野球の他に、同じようにそわそわできる連句という楽しみが増えて僕はとても嬉しく思っています。先輩方のように常勝の巨人（今年は何西武？）の中で、これからも何とか頑張っていきたいと思ひます。

（※ 10月10日、ヤクルト14年ぶりに優勝  
——編集部註）

原田 千町

私が初めて先輩から文音の申し込みを頂いたのはACCに入ってからで、間もないころだったと思う。それまでは知人とお遊びでまね事の歌仙を廻したりしていたが、まず巻紙で墨の香も高く頂いたのにすっかり恐れをなしてしまった。御当人は習字の勉強の為なので、付け句はボールペンでもかまいませんとおっしゃられ、ほっとしたもので、その巻紙もやがて便箋になりペン書きになり一巻の終わり近くにはほとんど電話で付け進むようになり、初手から色々なやり方を教えて頂いた。ずっと後になって能書家のまことに見事な筆跡で頂くようになり、毎回その判読に悩んだこともある。目上の方は三句でもよいが、お相手をさせて頂く方は五句が常識と知り、その五句が辛かったり、興に乗ってくだらないのが出来過ぎたり、それより頂いた句のどれを決定するかが悩みの種、どれにしようかなとつおいつするのが一番の酒の肴という方もある。こちらの発句で巻いたら相手の方の発句を頂いて巻くものと知り、やがてはお互に発句を出しあって二巻立てにするのが正式と教えられ、つまりは文を受ける度、一両日中には少なくとも十句は詠まねばならず、これは大変な事と思うものやがてこれが楽しみとなるとやや自虐趣味かとも疑われ病膏育、それが又何人かの方とだったりして重なつて着いたりすると些かバニックで、つい最も大切に思うもの程まずこちらを片付けて落ちついてなどと、かえって遅くなり失礼をしてしまうこともある。他の会の方から思いがけぬ文音の申し込みが舞い込んだりすると、あたふたとし

ことになるが、外様はお考えの違ひ、こだわりの違ひもそれぞれで当方としては打越と目、他、場の障りがとか、三句つづきになるのではとか、繕になりすなどとは礼を失うので申しあげられず悩んだ末これはこれで巻きすすむが、回も重なる猫養流ではこうなのですがなどと言つてしまつたりもする。いずれにしても文音は男性の方が有利のようだ。女同志は何の気遣ひもいらぬが、女から殿方へは申し込み辛い。何しろ数日おきに女名前の手紙が届き、ときに恋の場でここは少々濃厚になどという句がずらり五句も六句も並んでいたりでは家庭争議のもととなりかねない。相手様の事情はともかくやはり文のやり取り女は受け身の方がいいと思うのは些か古いのだろうか。もっとも女性三人ほどから東になって文音の申し込みを受けたとご機嫌の方もいるので教をたのむ手はあるようだ。文音での失敗は恥ずかしながら数限りない。生来の粗忽者誤字当て字はほとんど天才なので発句に硯の端溪を端溪と書いたらしくこれが又中国に實際にある地名とかで、脇句は当然内の句の筈と思つていたのに外の句が付いて来て首を傾げた所当方の過ちと知り恥入ったり、一巻の半ばではたと便りが途絶え、何かお気に障る事でも心に懸けつつ御催促がましいことは言うまい、あちら様の都合でそれなりけりになるとも、と思つていたら何とこちらが出したつもりの封書が戴いた付け句にまぎれていたのであったり、あさり場をうっかりしたり、遠慮のしすぎで月がややこしくなつたり、もう様々なのだが、そんなことも校合のときの話題として打ち解けさせてくれたりする。文音をさせて頂く方は他の方とはまた異なる親しみを持てるが、風流の交わり字の如くさらさらとい快いお付き合ひでありたいと願っている。

『猫養作品集Ⅲ』作品集募集

猫養会理事協議の結果、次のようにパートⅢ作品集募集をすることになりました。規定お守りの上奮つてのご応募お待ちしております。

- 捌は猫養会員の事。但し猫養会員以外の方が連衆に加わることには妨げない。
- 歌仙・二十韻夫々同一人捌一篇のこと。半歌仙に応募の方は二十韻はご遠慮下さい。
- 応募用紙は四百字詰原稿用紙(B4判)使用のこと。
- 文音の場合A↓B・B↓Aは一巻のみ。
- 平成四年の作品のこと。
- 応募締切日 平成四年十一月三十日。

送先

〒二七七 柏市加賀2-12-11 梅田利子  
TEL 0471-7218119

書式例

二十韻(もみぢ)	欄外へ	東明雅
○○○○○○○○		明雅
○○○○○○○○		秋元 正江
○○○○○○○○		式田 和子
○○○○○○○○		杉内 徒司
○○○○○○○○		雅
○○○○○○○○		江
○○○○○○○○		子
…	四百字詰原稿用紙	
…	(B4判)	
…	平成四年○月○日 満尾	
…	於 深川芭蕉記念館	
…	〜ここも 連絡先電話番号と捌人住所	

欄外へ

担当 下鉢 清子

◇ 猫養発展基金ご協力感謝いたします。

一口 海野海砂  
五千円 鈴木春山洞 (敬省略)

◇ 発展基金は随時受け付けております。よろしくお願ひします。

振替口座 東京31550348 猫養同人会  
◇ 年四会の猫養例会には初めての方もお気軽にご参加ください。

- 一月 歌仙興行
- 四月 正式俳諧と二十韻興行
- 七月 歌仙興行
- 十月 正式俳諧と二十韻興行

\* 連句とさかな \*

戻り鯉

杉江 杉亭

「目に青葉：」の句にも出て江戸時代から珍重されている初鯉は、脂の乗りも十分でなく少女めいた痛々しさの方が先に立つてあまり推せない。筆者の住む近所に小ていな鮎屋があり、開店当初からの常連の一人で毎週一回はふらりと訪れる。先客の常連に軽く会釈してカウンターの前に腰掛ける。親父さんから声あり「杉江さん、今日は戻り鯉から行きましょうか」「そうしよう」といつもの冷酒を口に含み、出された戻り鯉を一切れつまむ。「うまい」脂の乗りは申し分なく熟女の味わい。「酒のお代り」と声の弾む頃、夜も更けて行く。

〔Q〕 底の紅濃きまま木種落ちにけり

雨上がりたる庭の繖月

最近巻きました二十韻で、右のような月の句が出ました。脇句のあり方も含め、月を詠む時の視点など、出し方についてお教えください。（渋谷連句 鈴木美奈子）

〔A〕 御承知の通り、木種は初秋に咲く鑑賞花ですが、種類が多く、白木種・紅木種の外、八重の木種などもあります。「底の紅濃き」というのは木種の一つに宗旦木種というものがあって、花弁の底が紅い俗に底紅とも言われるものです。

木種は朝開くと夕にはしぼんで落ちる、いわゆる「種花一日栄」の諺通りです。だから、この発句、しぼんで落ちた宗旦木種の底の紅いのが見えたまま、庭に散らばっている景色を眺めての作だと思われま

す。これに対して、脇句「雨上がりたる庭の繖月」は、一応発句に付いているようだし、発句が初秋の句、脇は三秋の句ですから無難ですが、よく考えてみると、ふっと疑問が湧くのです。発句が地に散り敷いている木種を述べているのに対して、脇は空に浮かんだ二日月又は三日月を描き、視点がばらばらです。もし、地に落ちて

いる底紅が暗いところでも見えるようなものならば、たとえばこのような付句もあり得ましよう。 敷入や皆見覚えの木種垣 子規

同じ木種の句でも、これは夜目でもはっきり見ることが出来ます。だから、「雨上がりたる庭の繖月」でもよいのです。これは木種垣と繖月とが同一視野に入り、対称的に描いているとも言えるでしょう。

また、たとえば

江東にまた帰り住み震災忌 越央子

雨上がりたる庭の繖月

これも発句は自分の境涯を述べているのに対して、脇はあたかも発句の情を象徴したような叙景の句で、これでもよいのです。ただ、前に申しました通り、雨上がりの空の二日月・三日月では暗くて、底紅の散っている色を見分けることは困難でしょう。

脇は発句の景の余意、余情をつたえるのが根本ですから、発句の景から想像出来ないような月を出すのはまずいのです。それで出来るならば、

底の紅濃きまま木種落ちにけり

雨上がりたる空の昼月

とても直したら木種も見えてしまうし、折からの昼月を出したものと、一応よいでしょう。また、落ちた木種と月とを同一視野で描きたいというなら、

底の紅濃きまま木種落ちにけり

雨上がりたる庭の月影

位に一直されたら、明るい庭の月光の下に、底紅の色まで見えるという事になれば、それはそれで月の明るさを象徴しており、発句と違和感なく味わうことが出来ると思

林 空花

杉内 徒可

空花は第一回俳諧時雨忌に参加した感想を次のように述べている。

「いまから考えると、偶然、席を与えられて、牛耳先生の擲きに身を任せたいということが大切なことであったようだ。擲手が、たまたま牛耳先生ではなく、他人であったのなら、私のその後の連句への具体的な執念は、こうはいかなかったであろう。」

（『曼荼羅』六号）

空花の執心は時雨忌の翌月から、牛耳指導の義仲寺連句会を発足させた。そして、四十九年七月六日に没した牛耳の一周忌には遺稿集『摩天樓』を上梓している。連衆のわだとしおは五十年から例会作品の手控を作り始めていたが、五十二年一月から「杏花村」と名を変えて月刊誌として発行、百号まで続刊した。

空花が俳誌「胡蝶」を考え出したのは四十九年の夏頃。

胡蝶は、表六句、中十二句、裏六句の二十四句から成る。胡蝶の名称は源氏物語の第二十四帖の「胡蝶」より採ったという。

空花は池袋の西部デパートとサンシャインビルの両カルチャーセンターで「小説講座」を担当しているが、三句目の転じを重視する連句をやると、小説がうまくなると説くので、受講生の間にも胡蝶は浸透してゆく。

空花、本名は富士馬。大正二年七月、東京生れ。東京、東池袋に小児科医「精義堂医院」を開業している。年少より佐藤春夫門。詩人、小説家として高名。「文学に新風をまき起こそうとする新人の仕事を正しく評価し、激励を送り、なお一層の活動を

期待するために、月刊「文学界」に同人雑誌評を二十五年続けた功により」、五十四年菊池寛賞を受けている。

連句を始めて七年目に上梓された、俳諧俳論集『行々子』（東京義仲寺連句会刊）から三箇所引用してみよう。

★芭蕉が正風を樹立した以後については、私は興味がない。私に興味あるのは、当代の世相と、観念の羅列の時代の中に、芭蕉が談林の活気のなかに、その正風を樹立した瞬間であると云いたい。

★俳諧の歴史を辿って「田舎名士」「結社宗匠」と称せられて知っている人々の作品の全くつまらないことを知ったのは（その技術ではなく、その志に於て）改めて、近頃の最大の収穫であった。

★私の俳諧精神のめざすところは「歌仙」形式の復興などではない。当代詩のひとつの野心として（歌仙）を取りあげているに過ぎない。

編集部より

○ 今回も、楽しく、示唆に富む文章頂きました。ありがとうございます。  
○ ACCもこのところ新人がグッと増えました。「土良の会」というのも出来たそうです。新風を期待できるでしょうか。  
○ 今年の残暑はとりわけ厳しく感じました。お変わりなくご活躍くださいませよう。



季刊「ねこみの」通信 第九号  
発行者 猫養連句会  
印刷所 アトリエ・Newo